

主日の福音 2025/3/30(No.1346)

四旬節第 4 主日 (ルカ 15:1-3,11-32)

頂くはずの財産の分け前は父親の深い愛と赦し



ついこの前ですが、母親を福江ターミナルで完全に見失いまして、福江ターミナル案内所で迷子のお知らせの放送をしてもらおうか、真剣に考えるところまで行きました。その日は二回目の投薬治療を終えて仮退院する日で、10時に病院を退院し、11時45分のフェリーに乗せ、私も付き添って奈良尾で船を降りて弟とバトンタッチする予定でした。

福江港に行ってみると、平日にもかかわらず駐車場にほとんど空きが見当たりません。母親はすっかり足が弱っていて車を遠くに置いて歩かせるわけにもいかず、「ちょっとの距離だから」と思って横断歩道にいちばん近い場所で車から降ろし、「ターミナルの正面玄関で待っててね」と念を押して、私はいちばん遠い場所に空きを見つけたのでそこに車を置いて荷物を抱えて母親に合流しようとターミナルに行きました。

ところが中田神父がイメージしている正面玄関に母親がいません。「中まで入ったのか」と思ってターミナルに入ったら、ジャージを着た中学生がウヨウヨいたのです。雨後の竹の子のように背が伸びた、大勢の中学生に阻まれて、どうしても母親が見つかりません。じっと目を凝らしても、ショルダーバッグをたすき掛けにして投薬治療でごっそり抜けた髪を隠すために帽子をかぶった母親が見つかりません。11時45分まであと20分。次第に焦りが出て来て、パニックになりそうでした。

こうなると、良くないことが頭をよぎります。認知症の家族が散歩に出ていったまま、二度と会えなくなった。今晚、私の母親がそのニュースとして流れるのではないか。果てには最悪の結果で発見され、永遠の別れになるのではないか。私は血の気が引き、気が変になったように同じ場所を何度も行ったり来たりします。中学生には異様に見えていたでしょう。あとで知ったのですが、この日は中学校の先生を船で見送る日でした。どうりで中学生と保護者がうじゃうじゃいたわけです。

決心して、放送で呼び出そうと考えたその時、玄関をもう一度見たら母親がフラフラと歩いてきます。遭難者が見つかった瞬間は、こんな感じなのでしょう。肝を潰したのが一転して安堵に変わりました。それと同時に、心の中で母親を叱りたい衝動にも駆られました。しかしここはぐっと我慢して、「心配したんだよ」と声を掛けたのです。

母親はどこを歩いたのか、雨にずいぶん打たれていました。「ジェットフォイルの乗り場に行って、ここじゃないなあと思い直して玄関に戻ってきた。」心臓が飛び出すかと思うくらい驚きました。それでも、戻ってきてくれて何よりでした。ただ、ありがとうという気持ちでした。

母親とフェリーに乗り、奈良尾港に降り立ちます。弟が打ち合わせ通りに待っていていました。ちょっとトラブルがあったことを告げて、今まで以上に気をつけて過ごしてくれと頼んで交代しました。午後2時頃に別れましたが、奈良尾からの帰りの船まであと一時間あります。用意していた四旬節第4主日の福音朗読を開いて、あー母親を見失ったハ

プニングは、この福音朗読を読むためにあったのだと思ったのです。

朗読は「放蕩息子」のたとえです。父親は下の息子に財産を分与して旅立たせました。私は思ったのです。父親は後悔したかもしれない。息子を説得して、旅立たせるべきではなかった。もはや二度と会えなくなるかもしれない。あるいは最悪の結果で死の国に送り出さねばならないかもしれない。旅立っていく息子の姿を見失ったその時から、生きた心地はしなかったのではないか。そう考えたのです。

私も、同じ思いをしました。あの時、「先に降りてね」と言うべきではなかった。本当に後悔しました。ですから見失った母親を見つけたとき、帰ってきた下の息子を見つけた父親が飛んで行って息子を抱きしめ、息子の謝罪を遮ったのが、痛いほど分かったのです。上の息子は弟の犯した過ちを非難しますが、父親は上の息子が体験しなかった苦しみを味わったので、違う受けとめ方をしたわけです。

「お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。」

(15・32) 本当に、「死んでいたのに生き返った」「いなくなっていたのに見つかった」を心底体験しなければ、帰ってきた弟、帰ってきた母親を手放しで喜べません。生きていだけで、見つかっただけで赦してあげられる。それを初めて体験しました。

「放蕩息子」のたとえを、私はこれまでもずっと、「父親」の立場で理解しているつもりでした。しかし、誰かを「死んでいたのに生き返った」「いなくなっていたのに見つかった」と言える深い体験をしなければ、本当の意味で父親の立場で誰かを赦し、受け入れることはできない。今回つくづくそう思いました。徐々に年老いていく母親が、より深く放蕩息子のたとえを理解させてくれました。

四旬節第5主日(ヨハネ 8:1-11)